



# DE解析ソフトのOp.無しにBBIを作成する

今回は実際にコンソールに標準搭載のAdd/Subtraction機能を使ったBBI使用されているご施設の撮影条件や再構成条件を紹介し、係数の違いによる結果画像の変化を確認していきます。

## ■撮影条件例

軌道同期ソフトウェアOp.が搭載されている場合にはONにして撮影すると良いでしょう。Sure Subtraction ソフトウェアOp.との併用については次号ご紹介します。

No.	スキャンモード	kV	mA	スキャン速度	スライス厚	HP
1	GG-Heli	135kV	AEC	0.75s/r	0.5mm×80	65
2	GG-Heli	80kV				
AEC				SD	スライス厚	SureIQ
				10~12	5.0mm	FC03+ AIDR3D MLD

## ■再構成条件例

Add/Subtractionを使って得られる結果画像はノイズが強調されるため、用意する画像はノイズを抑えたものが良いでしょう。

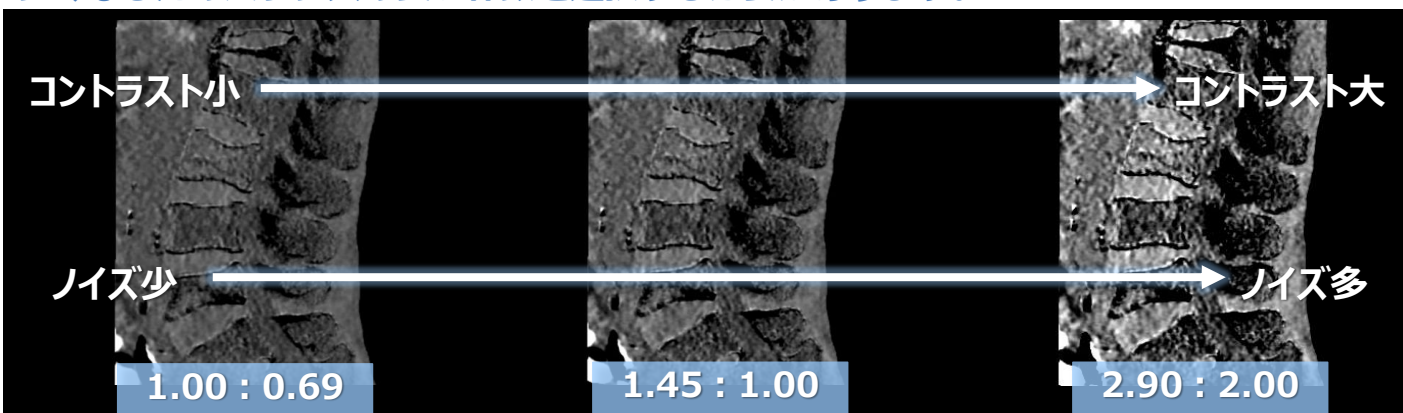
スライス厚	再構成方法	パラメータ	強度	BHC	WL	WW
0.5mm	AiCE	Body Sharp	Strong	+	50~80	160~200

## ■MPR

Add/Subtractionによる処理を行う前か後にMPRで任意のスライス断面を作成します。処理前に作成する場合は、80kVと135kVの角度や断面を揃えましょう。また、切り出すスライス厚はノイズの影響を抑えるため5.0mm厚程度がおすすめです。

## ■係数

用意した135kVと80kVの画像を引き算するとき、BBIでは骨のCT値の比率となるような係数を設定します。CT値の比率さえ守られれば係数の組み合わせは大きい数値ほど結果画像のコントラストが良くなります。一方でAdd/Subtractionの特性上ノイズも多くなるためバランスの良い係数を選択する必要があります。

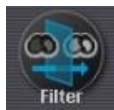




# DE解析ソフトのOp.無しにBBIを作成する

## ■ Image Filter

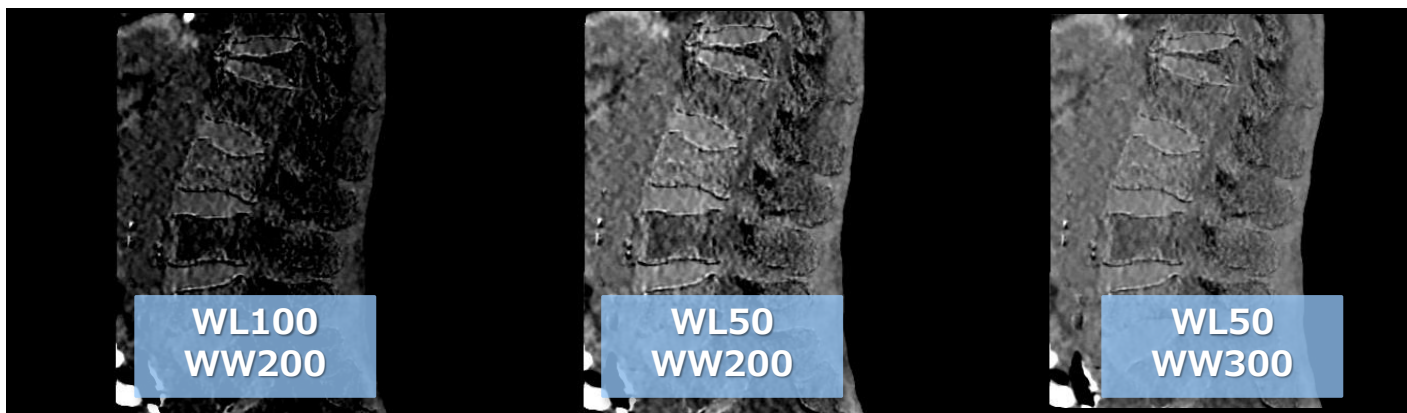
結果画像のノイズが目立つ場合は



内のスムージングフィルタを使いましょう。

## ■ ウィンドウ条件

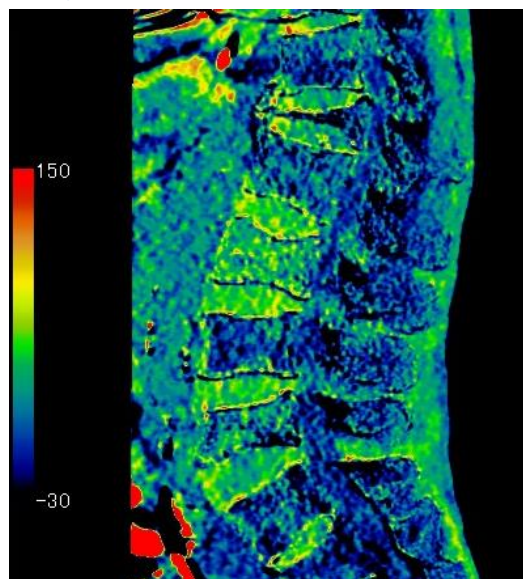
結果画像のコントラストは正常部と病変部の視認性にも大きく影響するためウィンドウ条件の調整が不可欠で、正常部がノイズの影響を受けず黒抜けするようなウィンドウレベルと幅を設定して観察します。



初めはWL50/WW200程度で表示し、症例に合わせて微調整するのが良いでしょう。

## ■ カラーMAP

結果画像の病変部がわかりづらい場合には、ツール内【Non-Linear window】機能を使ってカラースケールで表示することもできます。



例 : Rainbow CBP

※上記の内容はAquilionPRIMEV7.0での画面で、装置・バージョンにより操作が異なる場合がございます。ご使用の装置での操作に関してはキヤノンCTアプリケーション担当までお問い合わせください。